

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	倪 楽飛
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation)			
遠藤周作文学の宗教性 —ヴィクトール・フランクルのロゴセラピー (実存分析) を視座として—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	有元 伸子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	妹尾 好信	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	宮川 朗子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	下岡 友加	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	山根 道公 (ノートルダム清心女子大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>遠藤周作 (1923-1996) は戦後日本を代表するキリスト教作家である。日本の精神風土に適合させた「母なるもの」・「永遠の同伴者」としての遠藤のイエス像については共感と批判が相半ばしていたが、近年の遠藤研究では宗教多元主義や文学と神学の接点から再評価がなされつつある。本研究はそうした研究動向に添いながら、『夜と霧』で知られるオーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクル (1905-1997) が提唱した〈実存分析〉(ロゴセラピー) を援用することによって、遠藤文学に描かれた宗教性への評価の更新を企図するものである。</p> <p>論文は、序章、4部12章からなる本論、結章により構成される。</p> <p>「第一部 理論の射程」(3章) は本論文全体の理論編に相当する。はじめに遠藤の小説や評論におけるフランクルへの言及を検討して、遠藤のフランクルの思想への共鳴を確認した。続いて、フランクルの〈実存分析〉(ロゴセラピー) の基本的な概念を〈意味への意志〉〈意志の自由〉〈人生の意味〉の三つの柱を中心に説明する。さらに精神医学におけるフランクルの特徴が、無意識の衝動性よりも、その深層に潜む精神の欲求・「魂」の渴望の探求の重視にあることを述べて、精神分析批評の一つとして実存分析を文学研究に導入する意義を提示した。</p> <p>「第二部 苦悩・意味を求める人々」(3章) では、『死海のほとり』(1973) と『鉄の首枷 小西行長伝』(1977) の中期作品の「弱者の系譜」を対象として、〈人生の意味〉を求めて迷う「私」の問題から考究した。フランクルの『夜と霧』から直接引用された「世界はどうして、こう……美しいんだろう」(『死海のほとり』巡礼編) の言葉を手がかりに、各作品の人物の苦悩や寂寥の深層を実存の視点から丁寧に解釈し、魂の渴望に光を当てて、作品タイトルの含意を明示した。</p> <p>「第三部 実存・他者へのまなざし」(4章) では、『沈黙』(1966) と『スキャンダル』(1986) を、〈意志の自由〉と他者としての「汝」に焦点を当てながら検討する。代表作『沈黙』では、主人公ロドリゴに聞こえた「踏むがいい」という神の言葉の持つ意味を実存分析によって究明した。『スキャンダル』では、晩年の遠藤が追究した〈悪〉の問題を、(1) エーリッヒ・フロムの〈ネクロフィリア〉概念と実存との関係 (2) ロゴセラピーにおける〈脅迫神経</p>			

症)の視点による主人公の「分身」の解説 (3) 他者からの呼びかけによる救済の可能性の3点にわたり緻密に考察した。

「第四部 自己超越・無意識的宗教性」(2章)では、遠藤の集大成と目される『深い河』(1993)を、〈人生の意味〉の観点から、「私」を超えた「我」の形成と「我—汝」の関係構築の表象として読み解く。『スキャンダル』で追究された〈悪〉の問題を継承する『深い河』の女性主人公・成瀬美津子に焦点をあてて、主要人物・大津との交流を通して「祈りの真似事」であったはずの行為の霊的到達点を究明するのである。「結章」では、遠藤周作文学の宗教性を〈実存分析〉によって解析した結果と、実存分析批評導入の意義と可能性をまとめる。

このように、本論文は、遠藤がフランクフルトに触れて以降の中期から最晩年の主要作品における文学的営為を〈実存分析〉の観点から解説し、遠藤文学に描かれる弱者や〈悪〉の系譜の持つ意味と、彼らが「我—汝」関係を構築して超越的な存在に突き当たり魂のレベルで揺り動かされて人生の意味に触れる地点を明らかにしている。さらに特筆すべきは、フランクフルトのロゴセラピーを援用することにより、今後の汎用が期待される新たな文学理論としての「実存分析批評」を提唱したことである。遠藤におけるユング心理学との連関などの課題は存するものの、遠藤文学の宗教性に新たな光をあてた意義は多大であり、高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(文学)の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)